

〈コメント〉

記憶と芸術をめぐる

足立信彦

岩崎稔氏の指摘によれば、記憶がわれわれにとって切実なものとなるのは、それが死者をめぐる記憶の場合である。おそらくそれは、それが愛の記憶と結びついているからだろう。家族や恋人の死。愛する者の死をめぐる記憶。決して取り戻せぬものについての記憶は、慰めであると同時に苦しみの源でもある。

キケロが『弁論家について』⁽¹⁾で伝えるところによると、記憶術の起源には死がかかっている。詩人シモニデスは、富豪スコパスを頌えるべき詩に、慣習にしたがいカストルとポリュデウクスという双子神への賛辞を織り込んだ。その詩の代金半分の支払いを拒み、残りの半分は神々からもらえと言ったため、富豪は親族もろとも崩れてきた天井の下敷きになって死んでしまった。だが、詩人はその直前、正体のわからぬふたりの若者によって外へ呼び出されていたため無事だった。「つまりシモニデスは、唯一この災厄を生き残った者として、神々から報酬を得たのだ。……詩人は再び必要とされた……死者の身元がわからなくては、死者を記念することはできない。うたげの客たちの席順を正確に記憶していたシモニデスは、識別できないほど損傷した遺体のすべてに、その名を返してやることができた。こうして身元が確認できたので、死者の身内の者たちは、彼らをたたえ、しかるべく埋葬し、自分たちが正しい死者を嘆いていることに確信を持つことができた。」⁽²⁾

記憶の問題とは、死者たちに正しい名を返してやることである。

ただ一人の証人も残さずに消え去った人々に対して、いかにして名を返すか。ガス室に消えたユダヤ人、同性愛者、障害者だけではない。キリング・フィールドに埋められた人々。シベリアの収容所に送られた人々。アメリカ大陸に向かう船の底で命尽き、無造作に海へと投げ込まれた人々。カルタゴと呼ばれ、ローマ最大の敵として破壊し尽くされた都市と共に姿を消した人々。世界史はそのような名をもたぬ人々で溢れかえっている。

彼らに名を返すことがわれわれの倫理的責任だとしたら、世界はすでに倫理的には完全に破綻していると言うほかない。その中で生きているわれわれが正気でいられるのは、われわれの生が忘却によって支えられているからである。

記憶が苦しみのもとでこそあれ慰めにはならない時、記憶の問題はすぐれて忘却

(1) キケロー（大西英文訳）『弁論家について（下）』（岩波文庫、2005年）、94-95頁。

(2) アライダ・アルマン（安川晴基訳）『想起の空間』（水声社、2007年）、51頁。

の問題となる。なぜなら、岩崎氏が指摘したように、「〈技 ars〉としての記憶」すなわち記憶術に対置される「〈力 vis〉としての記憶」である想起は、忘却と共犯関係にあるからである。可能な限り正確な保存を目指す記憶術と違って、想起は思い出を再構成し、アイデンティティを構築する作業である。その時、記憶は単なる貯蔵庫ではなく、欲求にしたがって選別し変形するエネルギーとなる。

これは、記憶の詐術とも言うべきものだ。われわれは忘れることによって記憶する。世界が死から甦るために、われわれはかれらを忘れなければならない。そうやって、われわれは再生し、自己自身を構築し、前へ進んでいく。生きるということは死者を排除することなのだ。

しかし、それに抗う記憶というものがある。生きることを妨げる記憶、統一ある世界と自己の構築を妨げる記憶がある。

たしかに、多くの芸術もまた忘れることに協力している。生きるために作られる作品の数々。美やユートピアの表象。芸術が表象 representation、つまり不在のものの代理であるとしても、すべての作品が死者を呼び起こそうとするわけではない。

だが、ごく少数の作品は、忘れられた死者たちを思い出させ、われわれのツルツルとした生の邪魔をしようとする。香川檀氏が紹介した作品群は、あるいは完全な沈黙によって、あるいはあえて隠すことによって、死者たちを思い起こさせようとする。

とはいえ、たとえ空白の表現ないし表現の空白であっても、芸術として生に回収されてしまう恐れは充分にある。「〈力〉としての記憶」の支配力はそれほどまでに大きい。

おそらく、これらの作品を、他の、生に仕える芸術作品からかうじて区別しているのは、それらが死者の物質性を保存していることである。それらは、不在の表現であると同時にかつて存在した者たちの消息を伝える〈もの〉でもある。単なる不在の記号表現ではない。

もし記号であれば、解釈の多様性の中で、その意味をめまぐるしく変えるだろう。解釈は、その時々の方の場のなかで変容するものであるから、それが勝者の記憶に仕えることを拒み続けるのはむずかしい。

しかし、長田謙一氏が指摘したように、〈もの〉には常に排除された者の痕跡が残っている。不揃いでいびつな形、ざらざらとした表面、ランダムな並び方。〈もの〉が備えるこのような質が、記憶が整えられ統一されることに抵抗する。

それに関連して松本彰氏が挙げた例は示唆的である。ワシントンのヴェトナム戦争記念碑では、戦死者の名前を年毎に並べている。人々は、亡き息子、亡き夫の名前がどこにあるかを知るために、電話帳のようなぶ厚い名簿をめくらねばならない。

アルファベット順に整理された名前の羅列が人の心に響かないことは、アメリカ合衆国の軍人ですら知っていた。

死者たちに名を返すためには、名前を知るだけでは充分でないのだ。「神」という普通名詞を固有名とすることは唯一神への信仰告白であった。だが、神ならぬ人間を記憶にとどめようとすれば、固有名以上のものが必要なのである。人間は、かれとともにあった<もの>をよすがとして初めて固有名として記憶される。

それらの作品は、死者たちの、忘却された人々の記憶を伝える<もの>、いわば新たに創造された形見であろうとする。それらはもはや存在しない人々を表象するのではない。それらは人々の生の痕跡そのものとならんとする。その物質性によって、あらゆる解釈の多様性と抗争を超えて、ただ人々の存在を沈黙のうちに伝えるのだ。「<力>としての記憶」が加える変形と選択のプロセスに抵抗すべく、それらはただ静かにそこにたたずんでいるのである。